

## GIS を用いた平安貴族の移動経路の分析

吉田 真澄<sup>1</sup> 佐古 愛己<sup>2</sup> 杉橋 隆夫<sup>2</sup>

<sup>1</sup>立命館大学大学院 文学研究科 <sup>2</sup>立命館大学 文学部

平安京に関する研究は歴史学、考古学、地理学など様々な分野から進められている。しかし、行列でどの路が用いられたのかという視点から平安京を考察した研究は少ない。平安貴族の日記には、行幸や慶賀などの行事で通った経路が詳細に記録されていることがある。一日の移動の様子を行きから帰りまで克明に書かれる日もあれば、ほんの一部分だけ書かれる日もある。当時の人々は、どのような意識でその路を通っていたのだろうか。本報告では、平安時代の貴族の日記から経路がわかる事例を収集し、GIS（地理情報システム）を用いて移動経路の可視化を行った。平安京のどの路がよく通られているのか、人物や身分の違いで通る路はどのように変化するのか、また時代毎の経路の変遷等を分析した。平安貴族の移動経路から平安京の都市構造を検討した。

## GIS analysis of Heian aristocrat's migration pathway

Masumi Yoshida Aimi Sako Takao Sugihashi  
Ritsumeikan University

The research on Heiankyo is advanced from various fields such as the history study, archeology, and geographies. However, the research that considers Heiankyo from the aspect which road used by the procession is a little. The route that passed in events of Gyokou and congratulation, etc. might be recorded in Heian era aristocrat's diary in detail. There is a day to which the appearance of the movement during a day is written from going to the return in detail, and is a day when only only part is written. For what consideration did people at that time ..the road.. go? In this report, the migration pathway was made visible by collecting cases where the route is understood from aristocrat's diary at the Heian era, and using GIS (Geographical Information System). The road that passed in the difference between the person and the position how changes, and analyzed the transition of the route every age etc. though did not know which road of Heiankyo passed well. The urban structure of Heiankyo was examined from Heian era aristocrat's migration pathway.

### 1. はじめに

歴史学の研究では、どの史料に何が書かれているのか、その意味や背景について、多くの歴史学の研究者から考察されてきた。しかし、史料に書かれている情報を整理し、図示することについては立ち遅れているように思う。本研究では、平安京の都市構造を考える上で、平安時代の貴族や官人が残した古記録を取り上げる。先例を重視していた彼らの日記には行列の次第から規模、衣装、車など様々な情報が記されている。今回は、行列が平安京のどの路を通っていたのかに注目し、その経路について GIS による可視化を試みたい。

本研究は、「平安貴族の行動と見聞 - 古典史料アーカイブの試み -」プロジェクトの一端を担うもので、平安京とその周辺における貴族の移動や京都への人の流入及び都鄙間交流の意義を、具体的・総体的に追求することを目指すものであり、平安時代や平安京に止まらず、時空間的に広がる可能性を持っている。

### 2. GIS を用いた経路の分析

#### (1) データの収集

平安京内の移動に関する研究[1]は、天皇の移動である行幸がほとんどである。一方、院や貴族らに関しては天皇との比較のために取り上げられ、これまで深く論じられてこなかったと言える。そこで本研究では、天皇はもちろん、天皇以外の人物の移動の史料も収集し、その経路の可視化を試みたい。行列の経路について可視化されたものは少なく、平安京全体を見渡して一目でどの路が通る頻度が高いのかわかりやすく表現する必要がある。そこで今回は GIS を用いて、古記録に見られる経路の分析を試みてみたい。

まず、分析を行うにあたって移動の事例を表にまとめた。経路を多角的に分析するため、西暦、和暦、月、日、干支、天気、内容、出発地、目的地、移動の目的、移動の中心人物（家格、位階、官職）、経路などの項目別に分けてデータを収集した。基本的に一つの事例につき一行

表① データ入力例

和暦	西暦	月	日	干支	天気	内容	スタート	ゴール	目的	人物	経路	出典
永治1	1141	2	25	甲午	天晴	上皇八幡御幸也	八条東洞院御所	八幡	御幸	鳥羽上皇	東洞院、七条、大宮、以南如恒	『兵範記』
永治1	1141	3	8	丁未	白夜甚雨	上皇御幸鳥羽殿	白河殿	鳥羽殿	御幸	鳥羽上皇	六条	『兵範記』
久安5	1149	10	10	戌午	-	美福門院初有入内御幸	白河殿	四条御所	入内	美福門院	大炊御門、東洞院、四条皇居	『兵範記』
久安5	1149	10	11	己未	-	日吉行幸也	四条御所	日吉社	行幸	近衛天皇	東洞院、三条、白河、粟田口	『兵範記』
久安5	1149	11	25	癸卯	天陰	行幸福荷祇園、法皇為御見物	四条御所	福荷社	行幸	近衛天皇	東洞院、五条、鳥丸、六条	『兵範記』
仁平2	1152	3	16	辛亥	天晴	三位少将殿、被申御慶賀於所々	鳥丸殿	近衛殿	慶賀	藤原基実	東門、鳥丸、左衛門陣	『兵範記』
仁平2	1152	3	16	辛亥	天晴	三位少将殿、被申御慶賀於所々	近衛殿	鳥羽殿	慶賀	藤原基実	右衛門陣、室町、勘解由小路、大炊御門、東洞院、八条、富小路、九条口、河原、東路	『兵範記』
仁平2	1152	3	16	辛亥	天晴	三位少将殿、被申御慶賀於所々	鳥羽殿	新院	慶賀	藤原基実	七条、大宮、六条、東洞院	『兵範記』
仁平2	1152	3	25	庚申	天晴	石清水行幸也	近衛殿	石清水	行幸	近衛天皇	中御門、大宮	『兵範記』
仁平2	1152	8	14	丙子	白夜甚雨	左府為日上令参詣石清水給	東三条殿	石清水	参詣	藤原頼長	町尻、二条、西洞院、三条、大宮、七条、朱雀、遠路鳥羽北樓外、西河面	『兵範記』

でデータを取っている。慶賀など複数の目的地がある場合は、目的地によって何行かに分けてデータをまとめている。行列の途中から天皇と撰閤家の移動が異なる場合も別の事例とみなして、それぞれのデータを取っている。天皇や院の居所に関しては、川本氏の研究[2]に依った。土御門大路や上東門大路など同じ路でも様々な呼称で記されることが多い。このような路の異称に関しては竹居氏の考証[3]を参考にした。表にまとめる際には『平安京提要』に記載されている名称で統一して載せている。また、記事の欠損が激しく、読解困難な場合や途中から経路の記載がなくなり、路が特定できない場合は、確実に特定可能な部分までのデータを取っている。平安京外に出ると、異なる方向に進んだ等、具体的にどこを通ったのかわからなくなることが多い。

(2) 史料

経路が確認できる事例は表②に上げた古記録から収集した。経路が確認できる事例の数は古記録によって大きく差があることがわかる。貴族、撰閤家の家司や院司、中級官人など様々な立場から経路が記録されているが、その内容は天皇や撰閤家の者の移動に関するものが多く、中級官人ら自身の移動で経路がわかるものは大変少ない傾向がみられた。

今回、経路が最も多く見つかった『兵範記』からは約 80 件確認されている。記主である平信範は撰閤家の家司と鳥羽・後白河両院の院司であるという立場上、確認できた事例は天皇、院、撰閤家などの人物の移動に関する記事が多い。特に撰閤家の藤原基実が春日祭の上卿に任じられたときは連日、詳細な日記を書き残して

いる。また、平信範は平清盛と血縁関係があることから、平清盛やその娘徳子などの移動の事例も見られる。行幸や慶賀など以外の事例では、保元の乱において後白河天皇側が崇徳院側に奇襲をかける際、平清盛は三百余騎を率いて二条大路から、源義朝は二百余騎を率いて大炊御門大路から、源義康は百余騎を率いて近衛大路からの三方向から白河殿へ向かっていることがわかる。戦乱で通った路の記録が残っていることは、なぜ日記に経路が記されたのかを考える上でも興味深い。

表② 古記録に見られる経路の情報量

	古記録	年代	記主	事例
平安時代中期	小右記	天元 5-長元 5 (982-1032)	藤原実資	41 件
	権記	正暦 2-寛仁元 (991-1017)	藤原行成	9 件
	御堂関白記	長徳 4-治安元 (998-1021)	藤原道長	7 件
	左経記	長和 5-長元 8 (1016-1035)	源経頼	6 件
	春記	長暦 2-天喜 2 (1038-1054)	藤原資房	4 件
平安時代後期	兵範記	天承 2-承安元 (1132-1171)	平信範	85 件
	台記	保延 2-久寿 2 (1136-1155)	藤原頼長	8 件
	山槐記	仁平元-建久 5 (1151-1194)	中山忠親	32 件
	玉葉*	長寛 2-正治 2 (1164-1200)	九条兼実	17 件

※『玉葉』に関しては、1184 年までの記事を考察対象とした。1200 年まで含めると全体で 46 件見つかった。

(3) 分析手法

GIS での分析にあたって、平安京図は『平安京提要』付図の平安京条坊復元図を使用した[4]。経路の分析には、ESRI 社の ArcGIS を利用した。

まず、スキャンした平安京図を GIS に取り込み、地理情報を与えた。次に経路の分析をするため、GIS 上で平安京の路を描き、ラインデータを作成した。その際、ID 番号を付与した(図①)。



図① ID 番号

ID は図①の様に 5 桁で付与し、平安京の南北の路は 10000～、東西の路は 20000～で設定した。例えば、『山槐記』保元元年(1156)三月十日条には、石清水社に向かうにあたって「三条東行、東洞院南行、七条西行、朱雀南行」と記されている。このような情報を GIS で分析するため、「21508;21507;21506;21505;11505;…」のように ID に置き換えている。

また ID 入力作業の簡略化のため、通った場所をクリックすると、自動的に ID がテキストボックスに出力されるソフトを作成した(図②)。入力ミスが減らすため、一度クリックした場所はクリック不可となる仕組みである。これにより ID 入力にかかっていた時間が大幅に短縮でき、路を一本東や西に間違えることも減った。

Excel で分析したいデータを抽出する条件を設定し、実行する。GIS にて作成した地図とのデータを結合する。読み込んだデータを数値分類し、線の色分けや太さを変えて可視化を行う。

色の濃淡や線の太さなどを設定することによって分析結果を等級別にわかりやすく表示することができる。また、分析する条件を変えることによって人物別、身分別、目的別、年代別など様々な視点から分析することが可能と言える。

お え う い あ  
東洞院大路  
高倉小路  
万里小路  
富小路  
京極大路

- 1 一条大路
- 2 正親町小路
- 3 土御門大路
- 4 鷹司小路
- 5 近衛大路
- 6 勘解由小路
- 7 中御門大路
- 8 春日小路
- 9 大炊御門大路
- 10 冷泉小路
- 11 二条大路
- 12 押小路
- 13 三条坊門小路
- 14 姉小路
- 15 三条大路

- 表示
- 非表示

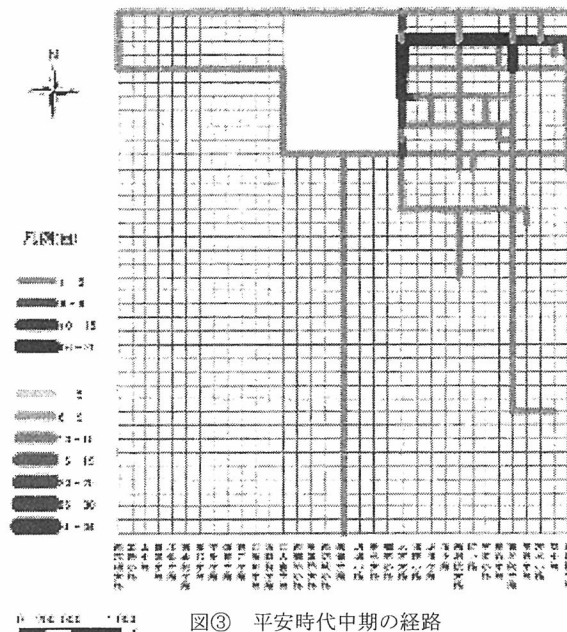
10101;20201;20202;10203;10303;10403;10503;10603;

リセット

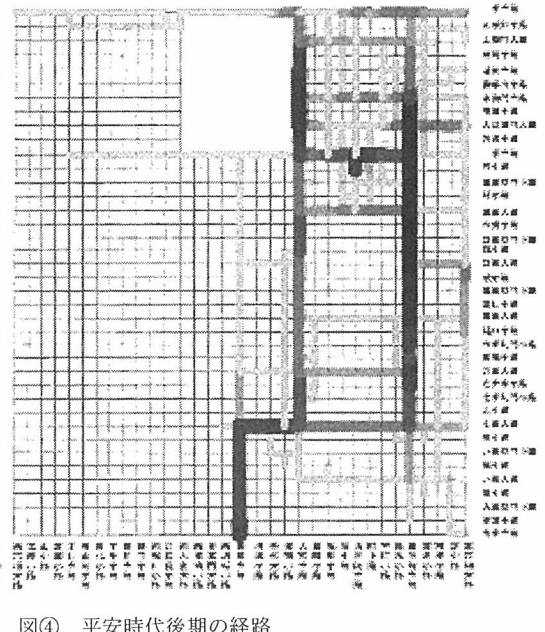
図② ID 入力用ソフト

### 3. 経路の可視化

#### (1) 平安時代中期と後期



図③ 平安時代中期の経路



図④ 平安時代後期の経路

実際に GIS で可視化したものが図③と図④である。図③は平安時代中期、図④は平安時代後期の古記録に見られる経路を頻度別に可視化したものである。それぞれ通る頻度の高い路の線を太く、かつ線の色が濃く表示されるよう設定している。これにより、平安京内のどの場所がよく通っていたのか一目で分かるようになった。

天元五年（982）に成立した慶滋保胤『池亭記』には、右京の衰退・荒廃と左京北部の繁栄を記録したことで有名だが、行列の経路という視点からみても右京の大部分が用いられていないことが改めてよくわかる。右京へは仁和寺、平野社、北野社、松尾社などの寺社に向かう時のみ経路が確認できる。

平安時代中期は、貴族の邸宅が集中していた左京二条以北に経路が集中しており、土御門大路、大宮大路などがよく用いられている。また、経路が何かしらの事情で変更されることはほとんどなかった。

平安時代後期の図④を見ると、まず中期と比べて行動範囲が格段に広がっていることが窺える。この背景には、白河・鳥羽といった京外の大規模な開発や里内裏や院御所、公家の邸宅の場所の変化があると言える。そして行列の通る路として、朱雀大路、二条大路、七条大路、東

洞院大路、大宮大路など特定の大路が多用されている。朱雀大路は平安京のメインストリートとして、大宮大路は大内裏に面しているため、二条大路と西洞院大路は東三条殿や閑院邸等が近くにあり、東洞院大路は四条御所や九条殿が近くにあるため、よく通っていることが図にも表れているのだろう。七条大路に関しては、古くから丹波への路として主要道路になっていたこと、東市に面していることなどがよく通る理由として挙げられる。

また、方忌や喪中の家の門前を避ける等、この時期から予定されていた経路が変更される事例が増加してくる。『兵範記』仁安二年（1167）七月二十七日条には、藤原基実の遺骨を運ぶ際、斎院の前を通ることを避けている様子がみられる。そして、宇治の木幡にある浄妙寺へ向かうときは、七条大將軍堂の前を通ることを避けている。このように喪中の家の門前を避けるだけでなく、ケガレを清浄な場所に持ち込まないように通る路を選んでいることがわかる。当時の貴族たちは、ケガレや祟りに関して、どのように行動すればよいのか、細部まで気を使っていたのであろう。

このほか寺社の前を通る時には、伏拝する必要があった。北野社の付近を通る際には、史料に時折「不可令過北野、伏拝給故也」とあり、行列が迂回していることがわかる。図④を見る

と、一条大路の西大宮大路と西靱負小路間は全く用いられていない。史料上、北野社のことが書かれていなくても北野社の前を迂回する事例も何件もあり、このような迂回をすることはある程度、一般化していたものと思われる。

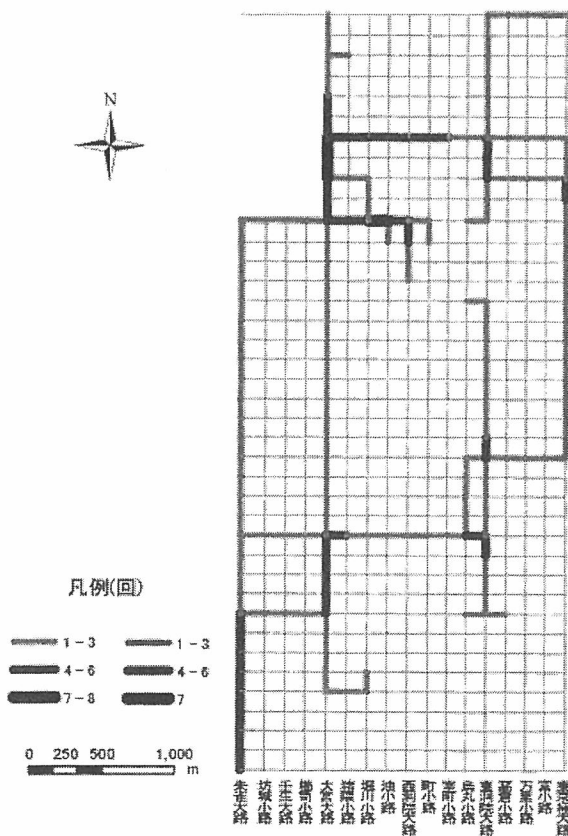
経路変更の理由には、院の存在も大きな影響を与えている。院が見物する場所の前を行列が通るよう、経路が変更されるようになるのである。行幸などの行列の見物は当時において重要な娯楽の一つであり、院は棧敷などで見物していた。

以上のように院政期の行列は、従来から続く行列が通るべき路、崇りやケガレなど陰陽思想の影響、院の見物など経路変更の理由が多様化していったのである。

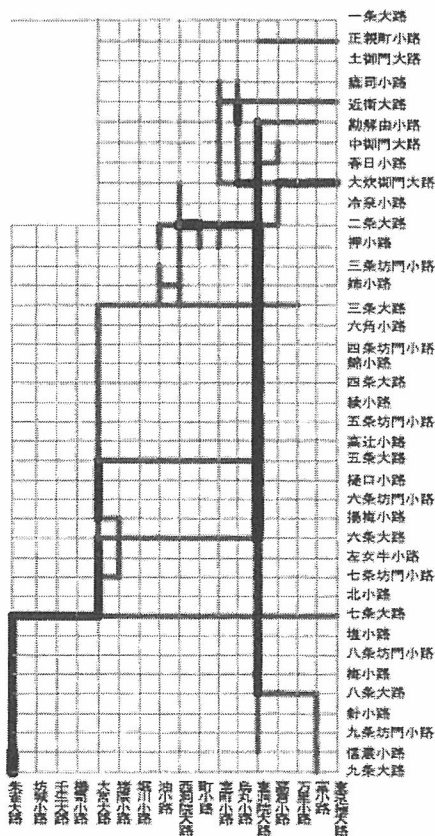
## (2) 身分による違い

身分によって行動範囲や通る路はどのように変わってくるのだろうか。『兵範記』から天皇の移動経路(図⑤)と摂関家の移動経路(図⑥)を抽出し、どの路がよく通っているか頻度別に描画した。どちらも右京を通っている事例が確認できなかったため、右京を省いた図にした。院及び女院、女御、東宮、平家等の人物の

移動に関しては比較できる程まとまった史料がなかったため、記事が多い天皇と摂関家の事例について取り上げたい。これらの図を見ると、天皇は左京二条大路以北及び朱雀大路の七条大路から羅城門辺り、東京極大路の大炊御門大路から四条大路に至るところがよく通っていることがわかる。これは、天皇の移動の理由の大部分が遷幸や方違行幸であるからと考えられる。特に、左京北部は中御門大路がよく通られている。里内裏や院御所の場所が左京北部に集中していることも関係しているであろう。天皇は平安京を南下する時は、二条大路から九条大路まで平安京のメインストリートでもある朱雀大路を通るべきといった観念があったこと、天皇の居所の変化により少しずつ経路も変わってきていることは既に先行研究からも指摘されている。院政期の天皇は朱雀大路を通っているが、次第に七条大路から九条大路間といった一部のみに利用に変化していることが図からも窺える。一方、天皇以外の移動では朱雀大路を二条から九条まで大きく南下している事例はみられない。院政期になると、院や摂関家は南に向かう際、鴨川から舟を利用することもあり、移動手段の変化も経路に関係があるのであろう。また、四条御所へ向かう際、天皇は東京極大路を南下し



図⑤ 天皇の移動経路



図⑥ 摂関家の移動経路

て、東洞院大路を西へ行き、四條御所に到着するという経路をとっている。しかし摂関家の場合は、東京極大路を通らず、東洞院大路を南下して四條御所に向かう経路である。従来の研究では、朱雀大路にばかり注目が集まっていたが、平安京の東端に位置する東京極大路を天皇が利用する意味についても考える必要があるのではないだろうか。『延喜式』の規定では、朱雀大路は28丈(約85メートル)、大宮大路は12丈(約36メートル)、東洞院大路は10丈(約30メートル)、東洞院大路は8丈(約24メートル)とあり、東京極大路は朱雀大路と大宮大路に次ぐ規模を持つ路である。『山槐記』治承三年(1179)五月二十八日条に鴨川が氾濫して東京極大路が通れない時、東洞院大路を代用していることから、東洞院大路より東京極大路の方が天皇が通るべき路として認識されていたのである。

摂関家の移動では、二条大路や東洞院大路をよく通っていることがわかる。移動の目的は、慶賀の事例が圧倒的に多く、次に賀茂社、春日社などへの参詣、春日祭、そして宇治に向かう事例が続く。慶賀では、昇進した者が関係者の邸宅へ挨拶に訪れる。院政期では、院御所や摂関家の邸宅などが左京北部や東洞院大路付近にあるため、このような図になったと考えられる。図⑥を見る限り、摂関家の者が大内裏に向かう事例はないが、移動の経路が記されていないだけで参内する記事は数多くある。おそらく摂関家の邸宅から大内裏への経路は日記に記すまでもなかったであろう。

院の移動の事例は、『兵範記』から数件しか確認できなかった。院の場合は、自身が動く事例よりもむしろ一条大路や七条大路、河原などで行列を見物していたという記事の方が多い。当時、行列の見物は娯楽の一つであり、院は、行幸、御幸、入内、春日祭や八十島祭の使の行列など様々な行事を見物している。行列は参加者だけでなく、見物人がいてはじめて成り立つものもあると言える。行列の通行と棧敷の設置という二つの条件を可能にする路は、大路ほどの道幅が必要とされたていたのではないだろうか。

#### 4. 今後の課題

古記録に見られる情報を可視化することによって、平安京内での行列の経路が一目で捉えやすくなった。しかし、現状では線の太さと色の濃淡での静的な表現にとどまっている。経路と邸宅の場所との関係は重要とはいえ、邸宅を描き入れると、表現の都合上、見辛くなってしま

う問題がある。また、行列がどちらに進んだのか等、よりわかりやすい表現を目指して今後、更に検討していきたい。史料上、「以南如常」とあり、経路が省略されていることも多々ある。それがどの路を示すのか、データを蓄積することでモデルコースを推測してみたい。今回は平安京条坊復元図の上に経路を可視化したが、平安京は考古学の発掘成果から図の通りに完成していなかったことが指摘されている。このほか平安京の路に関する研究[5]もあり、考古学の発掘成果も合わせて考えていかなければならない。

#### 5. おわりに

本報告では、GISを用いて古記録の情報を可視化することで、平安時代中期と後期の行列で通る路の違い、身分による経路の違いを明らかにした。GISによる分析は、平安京の都市構造を考える上で大変有効な手段と言える。しかし、経路を可視化した図だけが独り歩きするような状態を避けるためにも、その都度、史料に立ち返って平安京について考えていきたい。

#### 参考文献

- [1] 小寺武久: 平安京の空間的変遷に関する考察(1), 日本建築学会論文報告集, Vol165, 1969. , 大村拓生: 中世京都首都論, 吉川弘文館, 2006. , 生島修平: 羅城門・朱雀大路の存続と京職, 白山史学, Vol45, 2009. , 佐古愛己, 上島理恵子: 源氏物語の時代 一人と文物、デジタル可視化の意義一, 立命館文学, Vol612, 2009
- [2] 川本重雄, 続法住寺殿の研究, 院政期の内裏・大内裏と院御所, 文理閣, 2006
- [3] 竹居明男: 平安京街路名異称集成(稿) 一平安時代を中心に一, 古代文化, Vol46, 1994
- [4] 古代学協会・古代学研究所編: 平安京提要, 角川書店, 1994
- [5] 山本雅和: 平安京の街路と宅地, 平安京の住まい, 京都大学学術出版会, 2007